

桂林莊雜詠諸生に示す（その三） 広瀬淡窓

幾人か 笈を 負うて 西東 よりす

両筑 双肥 前後の 豊

花影 簾に 満ちて 春昼 永く

書声 断続して 房櫳に 響く

幾人員笈自西東 兩筑雙肥前後豊
花影滿簾春晝永 書聲断續響房

解説 勉学中の諸生に示した詩である。諸国から集まった塾生たちの、読書に余念のないさまを詠う。

語釈 ※幾人||数えきれぬほど多くの人々。※負笈||郷里を出て遊学すること。※西東||西からも東からも。どの方角からも、という意。※両筑||筑前と筑後と。※双肥||肥前と肥後と。※前後豊||豊前と豊後と。※春昼永||春の日ざしが、麗らかに長閑であること。※書声||書物を音読する声。※房櫳||居室の窓。読書の声が窓外にまで響くこと。

通釈 ここ桂林莊の塾生になろうとして諸方から集まって来た者の数は、数えきれぬほど多い。また、出身地も、筑前・筑後・肥前・肥後・豊前・豊後と多岐にわたっている。それら多くの塾生たちが、簾いっぱい梅花の影のうつる、うらかな春の日の昼さがりにも勉学に励んで倦むことを知らず、読書の声があるいは高くあるいは低く、窓外に響いてくる。